

とを深思すべきであらう。

「満洲はロシアのものだった」(幣原の見解)

対支友好政策で知られる幣原外相の満洲観はどうであつたらうか。

満洲事変発生直前の昭和六年七月二十八日及び三十一日、来日中の広東政府外交部長・陳友仁が幣原外相を往訪し、満洲問題につき会談した。陳は、在満日本権益の尊重を代償として日本から広東政府が正式支那政府であるとの承認を取りつきたいとするもののやうであつた。幣原は陳に「支那人は満洲を支那のものとして考へてゐるやうだが、私共からみれば、それはロシアのものだった。団匪事件の後に、牛莊の領事を任命するのにロシアの許諾を求めたといふやうな事情であつた。支那の学生などは、さうした歴史を知らないから自分の力で満洲を取り返したやうに考へてゐるが、ロシアを追ひ出したのは日本である」と述べ、日本の在満権益に関する日本の立場を次の如く説示した。

「日本を対象とした一八九六年の露清密約の有効期間は十五年であつて、日露戦争はその期間内に発生した。露国は同条約が締結されると直ちに満洲侵略政策の実行に着手したが、日露戦争前の日露交渉の記録は、当時露国が実際上満洲を以て自国領土の不可分の一部と目してゐたことを明確に立証するものである。さうした露国の威圧活動に対し、清国は全く無力であつて一言の抗議も提出したことなく、この事態がいつまでも自然の推移に放置されてゐたならば、満洲はとくに清国領土中より消え去つてゐたであらうことは疑ひを容れない。清国をしてこの広大な沃地を保持することを可能ならしめたものは、実に日本の武力干涉に外ならない。我々は清国の日露戦争に対する厳正中立の宣言に信頼し、終始同国領土保全の方針に忠実であつたわけだが、もし当時、露清秘密同盟の条項が暴露されてゐたとすれば、日本は上述の領土保全の方針を一変して、別個の政策をとるに十分な

理由のあることを認められてゐたであらう。

日露戦争終結以来、満洲は驚くべき進展を示し、支那の他の地方にかつて見ない平和と繁栄とを獲得したが、その発展の少くとも一部分は日本の企業と投資の結果であることは、日本国民の確信する所である。我々は満洲の領土権を要求するものではない。しかし、日本人が、内地人たると朝鮮人たるとを問はず、親睦と協力に基づいて満洲に居住し、商工、農業に従事し、その他一般に同地方の経済的開発に参加し得るやうな状況が確立されることを期待するのであり、これは少なくとも我々の道義的に要求し得ることであると考へる。云々」(須磨弥吉郎「在支十有一年と外交秘話」及び「幣原外相・陳友仁会谈録」外務省「主要文書」下)

幣原でさへ、満洲を無条件に支那の領土とは考へてゐなかつたのであり、以て当時の日本人一般の満洲観を知ることができよう。

(註) 同秘密条約は後年ワシントン會議に於ける顧維鈞の陳述で明らかになつた(第六章第二節参照)。

第七節 事変と建国を考へる

日本の力なくして満洲の安定なし

戦後の東京裁判の大きな誤りは、満洲事変を支那事変の開始点としてのみ捉へ、満洲事変自体の発生原因を一切無視した点である。

満洲事変が、日露戦争以来四半世紀に亙る日華間の軋轢と紛争の帰結点であつたことは既に述べた。

我国は日露戦争で満洲を露国の手中から救ひ出し、この荒蕪の地に鉄道を敷き、産業を興して繁栄の基を築いた。清朝の封禁政策によつて未開発のまま久しく放置されてきた満洲に近代文明の新生命を吹き込んだのは日本だったのであり、その満洲発展の中心となつたのが満鉄であつた。辛亥革命以後、支那本部では総数二百万を算する軍隊を抱へた諸軍閥が抗争に明け暮れ、やがてソ連の力を背景に共産勢力が浸透するや争乱と国土荒廃は果てしなき有様となつたが、山海関より北方、満洲の地には支那内乱の惨禍及ばず、平和な別天地として発展して行つた。これは僅か一万の我が関東軍がよく満洲の治安を維持したこと、そしてそれが支那本部の争乱を嫌ひ「保境安民」を求める満洲民族の願ひとよく合致したためである。支那の戦乱を逃れんとする多くの漢民族が満洲に移住し、その数は毎年百万と云はれた。昭和三年秋、満洲を視察した米モルガン財団代表ラモントは、オールズ國務次官に宛てた手紙の中でかう書いてゐる。

「自分の観た所では、今日満洲は全支那で殆ど唯一の安定せる地域である。かつ日本人が存在することによつて満洲は支那問題に於ける不安定要素であるよりは安定勢力となることが期待される。日本は軍事的意味に於てのみならず、経済的にも満洲を發展せしめつつある。日本がかくするのは、満洲に赴く少数の日本人開拓者の利益のためではない。實際の話、満洲開発は中国人の利益となつてゐるのだ。不安定な戦争状態が中国の広大な部分に拡がつてゐるため、今や中国人は、他の何処に於ても受けねばならぬ匪賊行為や略奪から逃れるために、何千人と云ふ単位で南満洲へ流れ込みつつある」

ラモントの觀察は正確であり、その見解は公正であつた。このやうな發展の結果、辛亥革命当時千八百万だつた満洲の人口は、二十年後の満洲事變の頃には三千万に達したのである。また日本人が経済開発に努めた結果、満洲の貿易は増加し、大連海関が開かれた一九〇七年の貿易額を一〇〇とすれば、二十年後の一九二七年には、支那本部二六四に対して、満洲六五五といふ顕著な發展を示したことは既に述べた。日本の軍事的経済的努力なくして満洲の平和と發展の有り得なかつたことは何人も否定し難いところであらう。

日本が露清密約を知つてゐたら

満洲問題は少なくとも日露戦争にまで遡らねば、真因を説明することはできない。而してその日露戦争を誘発したのは、三国干渉の報酬としてロシアが清国に強要して結ばせた露清密約（一八九六年）である。この密約は、対日戦争の場合に露清共同して戦ふことの他に、露国軍隊を極東へ輸送するため、シベリア鉄道とウラヂオストクを結ぶ満洲横断鉄道の建設を定めてゐた。この東支鉄道こそ、やがて露国の満洲侵入を助け、日露戦争を誘発する重要な媒体の役目を果たすことになつたのである。実はこの密約の存在を日本が知つたのは、一九二二年のワシントン會議に於てであつた（第三章第一節及び第六章第二節参照）。

もし日露戦争当時、日本が露清密約の存在を知つてゐたならば、日露戦争に勝つた日本は、清国に迫つて南満洲全域の割譲を要求することができたに違ひない。そして、もしその時に日本が南満洲を取得してゐたならば、その後の満洲に関する問題は一切発生しなかつたであらう。更に付言すれば、我が国が日露戦争に費した二十億円の負債は元利合計六十億円に達し、満洲事變当時、日本はまだこれを返済しつつあつたのだ。支那はこの費用を一銭も負担せずして満洲を露国から取戻してもらひ、しかもその上、満洲を救済した日本を満洲から放逐せんとしたのである。余りにも手前勝手で虫の良すぎる話ではなからうか。

「極度に複雑なる事件」（リットン報告書）

国際連盟現地調査団の報告であるリットン報告書は満洲に対する日本の立場に全面的に同情してゐるわけではないが、それでも、満洲赤化に対する我が国の憂慮には、相当な理解を有してゐたと思はれる。次の一節は満洲の共産

化についての我国の重大関心を的確に云ひ得てはぬないだらうか。

「ソ連邦政府及び第三インターナショナルは現行条約を基礎として対支關係を維持せる一切の帝国主義諸國に反対する政府を採用したるを以て、右両者が主權回収の闘争に於て支那を援助することはあり得べきことなりとせられたり。この形勢の發展は日本が隣邦露西亞^{ロシア}に対してかつて抱きたる一切の懸念及び疑惑を復活せり。かつて日本と戦争したる露國はその戦争後数年の間に友邦及び同盟國となりたり。しかるに今や右關係は變化し、北滿國境を越え来る危険の可能性は再び日本の関心事となれり。北部に於ける共產主義者の教義と南部に於ける國民黨の排日宣伝との提携の有り得べきことを想像し、日本は益々日露兩國の間に共產主義及び排日宣伝に染まざる滿洲を介在せしめんとする希望を感じるに至れり。日本の危惧はソ連邦が外蒙古に於て獲得せる優越なる勢力及び支那に於ける共產主義の發達により最近数年間に於て更に増大したり。……」

そして同報告書が「解決の原則及び条件」の章の中で述べてゐる次の言葉は事件の本質を鋭く突いたものと云へよう。

「前掲各章の讀者にとりては本件紛争に包含せらるる諸問題は往々称せらるるが如く簡單なるものに非らざること正に明かなるべし。即ち問題はむしろ極度に複雑なるを以て一切の事実及びその歴史的背景に關し十分なる知識あるもののみ、これに關する決定的意見を表明する資格ありといふべし。本紛争は一国が國際連盟規約の提供する調停の機会を予め十分に利用し尽すことなくして他の一国に宣戰を布告せるが如き事件にあらず。また一國の國境が隣接國の武裝軍隊により侵略せられたるが如き簡單なる事件にもあらず。何となれば滿洲に於ては世界の他の部分に於て正確なる類例の存せざる幾多の特殊事態あるを以てなり」

滿洲事變の複雑さと歴史的背景の深さを云ひ尽した名文である。滿洲事變は「侵略」と呼べるやうな單純な事件ではない。もしこれが侵略であるとしたら、ソ連の外蒙古、バルト三国、フィンランド等に対する屬領化、併合、領土侵奪は何と呼ぶべきなのか。更に十余万の正規軍を投入して行なはれた同じくソ連のアフタギスタン侵攻の

事實は、何とみるべきなのか。この明らさまな侵略を「侵略」と云はずして（NHKはじめ日本のマスコミは「武力介入」と呼ぶ）滿洲事變を侵略と呼ぶことは、無知でなければ、恐るべき歴史の歪曲である。

滿洲事變が「世界に類例を見ぬ」複雑にして特殊なる日支關係の中から發生したものであることを考へれば、「滿洲事變は原因であるよりは結果である」と云ふ言葉の意味も理解できることと思ふ。

滿洲建国の理想——宣言と国歌に見る

滿洲建国宣言は大同元年（昭和七年）三月一日に發せられた。同宣言は建国の理想を次の如く高らかに謳ひ上げてゐる。

「ひそかに惟ふに政は道に本づき、道は天に本づく。新國家建設の旨は一に以て順天安民を主となす。施政は必ず真正の民意に従ひ、私見の或存を容さず。凡そ新國家領土内に在りて居住する者は皆種族の岐視尊卑の分別なし。原有の漢族、滿族、蒙族及び日本、朝鮮の各族を除くの外、即ちその他の國人にして長久に居留を願ふ者も亦平等の待遇を享くることを得。……力を尽して往日黑暗の政治を除去し、法律の改良を求め、地方自治を勵行し広く人材を収めて賢俊を登用し、……更に進んで教育の普及を云へば、當にこれ礼教を崇ぶべし。王道主義を實行し……東亜永久の光榮を保ちて世界政治の模型と為さむ。その對外政策は則ち信義を尊重して、力めて親睦を求め、凡そ國際間の旧友の通例は遵守を敬謹せざることなし。……その自ら我が新國境内に投資して商業を創興し利源を開拓することを願ふもの有らば、何國に論なく一律に歡迎し、以て門戸開放機會均等の實際を達せむ。……極めて誠懇なる表示を以て三千万民衆の前に向ひ實行を宣誓す。天地昭鑑、此の言を渝ふることなし」支那従来の惡弊たる排外主義と背信行為並びに張家長年にわたる秕政の反省の上に立つて、五族協和に基づく王道政治の建国理想を高邁に宣布したものと云ふべく、その行文及び行間に真摯の氣持を感じることが出来る。理

念よし。文章またよしである。建国後の満洲国が必ずしも理想通りに運営されなかつた点はよく指摘されるが、世界がこの崇高な理念を以て出発した新国家を、最初から白眼視し、あるいは否認したのはまことに残念なことであつた。

(註) 一九三三年(昭和八年)九月、ロンドン・タイムズ紙は「独立後二カ年の満洲国」に関する報道記事を掲載した。その中で満洲国に対する批判のみならず次のやうな報道論評をして、満洲国が健全に發展してゐる姿を伝へてゐるのは注目に値しよう。

「外来の訪客は過去一ケ年に於ける満洲国の財政上の迅速な進歩に驚くであろう。通貨は安定した。一文の値打もない旧軍閥の不換紙幣の洪水に悩まされて居た満洲国にとつて、これだけでも測り知れぬ恩恵だ」「満洲国に於ける在留外人は外国商権の将来に関して懸念を抱いて居ることは勿論だが、大体日本人の施設に対して好感を抱いて居る。やらうと云ふことを実際にやる実践的な日本人を相手とすることとなつて助かつたと云ふのだ。三十年も前から支那人が直ぐ始めようと云つて居た各般の計画が今や着々実施されるに至つた……」「満洲国は既成事実だと云はねばならぬ。二ヶ年前に於ける日本の行動の是非は、極東の現状乃至将来に対して最早関連のない事柄だ。満洲は今や『啓蒙的開發』と云ふのが最も適切な過程を経過してゐる。啓蒙的な一番いい証拠は、三千万の民衆がこの過程から恩恵を受けてゐることだ。勿論彼等は日本人ほど利益を享けぬだらう。然し日本人は仕事の大半を引受けて居り、利益に関して獅子の分前を主張するのが当然だ」

これはタイムズ特派員の見た満洲国についてのレポートであるが、事変と建国を経て、はじめて安定と發展へ向はんとする新満洲の姿を客観的に描写してゐると云つてよいだらう。

帝制を倒したロシアの専制赤色政權をデモクラシー国家として歓迎した米國が、満洲国に対して寛大な態度を示さなかつたことは奇妙であると共に不幸なことであつた。満洲国は、少なくとも誕生の当初に於ては、アジアは無論、世界の模範國家に成長する可能性を秘めてゐたことは間違ひなかつた。

國家とは倫理的理念の実現を目指す政治的共同体である。このことは、儒教思想の伝統をもつ支那では十分に理

解されてゐた筈であるが、支那の現実政治は暴状底止する所を知らず、道義國家、王道國家の理想は地を払つた觀があつた。孫文は輕率にも共產ロシアを「王道國家」と錯覺し、支那赤化への道を開いてしまつたが、共產主義も結局は、弱肉強食の赤い帝國主義であり、仮借なき恐怖專制と搾取の政治であることは、その後の歴史の証明する所となつた。とすれば混沌底なき東亞にあつて、王道の理想を掲げた満洲國が出現したことは、たとへその現実の姿が理想通りではなかつたにせよ、人間の高い志向の表はれとして歴史に記録されて然るべきではあるまいか。

建国宣言にも述べられてゐるこの國家理想は、満洲國国歌の中に格調高く謳はれてゐるので、紹介しよう。排他主義や闘争主義を排し、民族共存協和と王道主義が強調されてゐる。

滿洲國国歌(原文支那語。左は仮訳文)

天地の内新滿洲あり、

新滿洲即ち新天地、

天に聳え地に立ち苦憂なし。

我が國家を造成す、

只親愛あつて仇怨なし。

人民三千万人民三千万、

縱令十倍を加ふるも亦自由なり。

仁義を重んじ礼讓を尚び、

我が身を修む。

家は既に齊ひ、國は既に治る、

他に何をか求めん。

先づ世界を同化し、
更に進んで天地と同流す。

第十一章 北支をめぐる日華関係